

# 千葉菌類談話会通信

## Chiba Mycological Club Bulletin

	ページ
目次：きのこ古譚（五）.....1	行事報告.....7
外国のキノコ図鑑の紹介（1）.....3	モグラノセツチンタケ発見記.....8
きのここと花言葉.....5	表紙によせて.....9
講座案内.....6	

特別付録：きのこ山通信



Dr. Minoru Hamada

®

Feb. 1995 No. 9

# きのこ古譚（五）

根田 仁

## 一名所図会にみるきのこ一

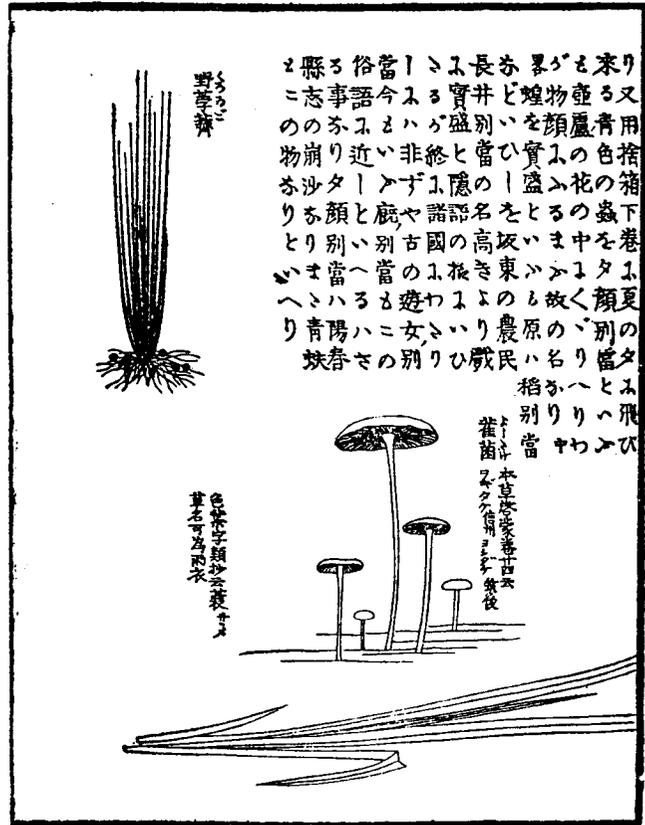
江戸時代、「〇〇名所図会」などの名前で、日本各地の名所紹介の図入りの本が多数出版された。この中にはきのこの名所なるものも見られる。摂津名所図会では「マツタケ狩り」の図があり、最近のきのこ関係の本にも掲載されている。その他、日本山海名物図会には「大坂のマツタケ市」があり、マツタケはいつの時代も人気のあるきのこのようだ。

さて、千葉県にはそのようなものがないのかと探したら、利根川図志にあった。「利根川図志」は、利根川流域の歴史・伝説・動植物から名所・祭事迄を記した地誌である。この書の中心となっているのは下総の布川という町で、安政二年に赤松宗旦によって書かれた。きのこの登場する部分を引用すると「ヨシタケ、蘆を刈りたる湿地の刈株に生ず。乾地には生ぜず。蓋状独立色白し。或は黄を帯び或いは微黒を帯ぶる事あり、四月多く生ず。味朴樹菌（エノキタケ）の如し。

又乾かして貯ふる者あり。即ち本草の蘆菌なり。（蘆はラギなれど、散文にて通はしいふものか）。（中略）（又四月頃蘆筍の一二尺なりたるを、刈り積みて田に培せむとする者の、雨に朽ちたるが上に生ず。これは色味全く同じけれども、朽ち易く貯へ難し。）」（岩波文庫版より）

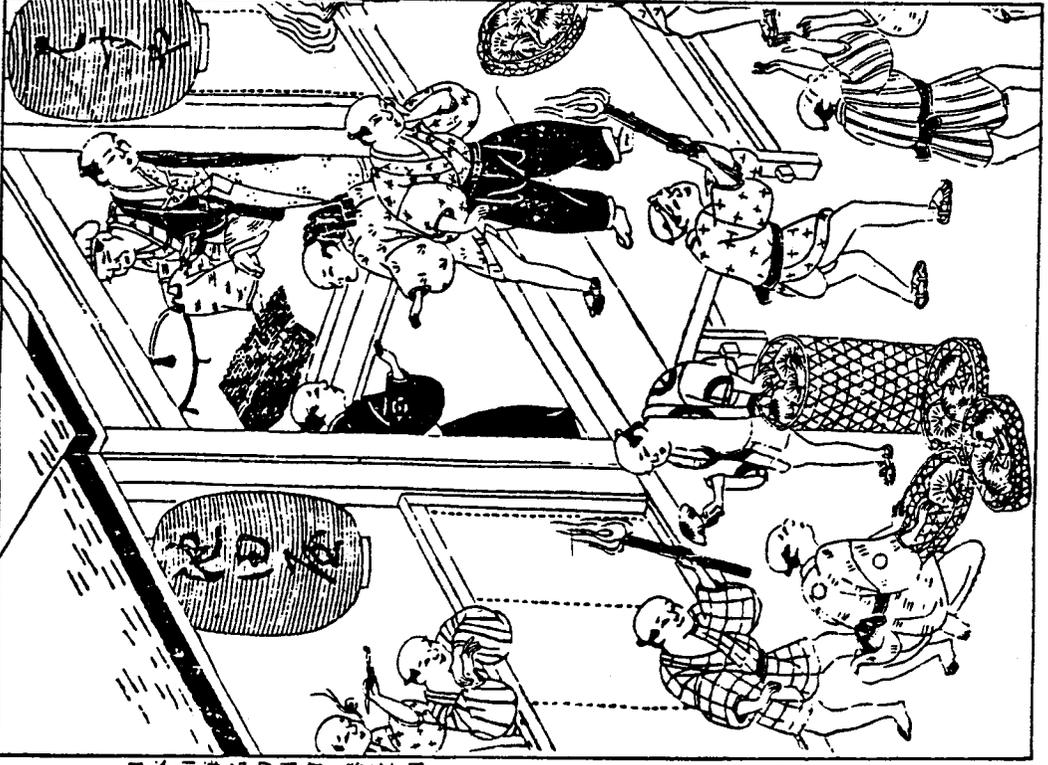
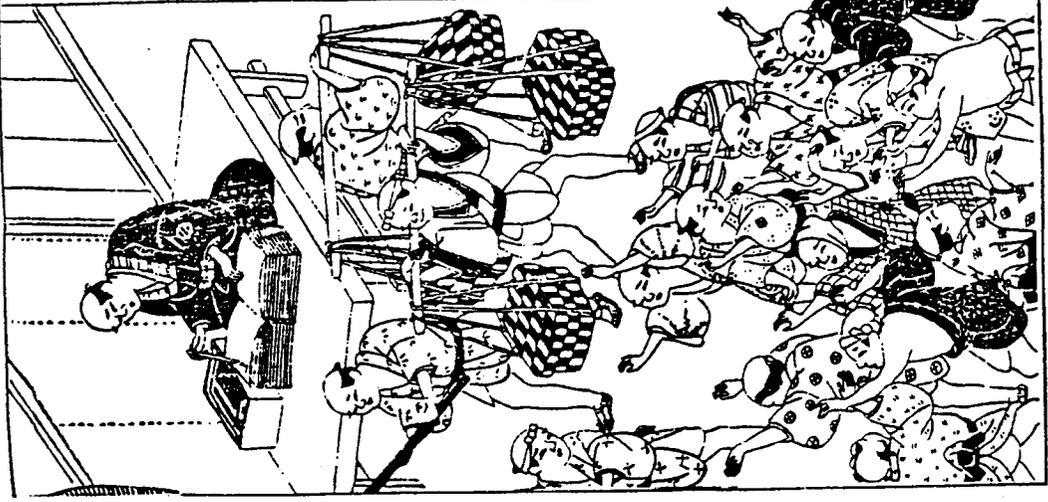
ヨシタケとは一体何だろうか？最後の方に登場するきのこはヒトヨタケのなかまのようだが、ヨシタケは、それよりもしっかりしたきのこらしい。イネ科の枯株から出るきのことしては、ニセホウライタケなどが考えられるが、食用になるというから、もっと肉質のきのこかもしれない。

一卷志 利根川



市松市側市

大坂を極端のあつちうと云ふは、此の市松の市松と  
 之は、大坂の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と  
 毎夜毎朝也、此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と  
 此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と  
 此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と  
 此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と云ふは、此の市松の市松と



日本山海名物圖會 卷之四

# 外国のキノコ図鑑の紹介（1）

佐野 悦三

## 1. はじめに

千葉菌類談話会に入会させていただいてから、変形菌に加えキノコにも興味をもつようになりました。国内には本郷・今関両先生の編著になる保育社の「原色日本新菌類図鑑（I）・（II）」や、山と溪谷社の写真図鑑「日本のきのこ」などすぐれた図鑑があります。また地方ごとにそれぞれ特色のある図鑑が続々と出版されています。これらの図鑑を見てみると、キノコは日本にだけ分布するもの、日本と合衆国東部や南部とに隔離分布するもの、北半球一帯に分布するもの、さらに凡世界的に分布するもの、それ以外にもいろいろな分布パターンがあるようです。

それでは、外国にはどんなキノコが生えるのでしょうか。ある地域と別のある地域との間にどんな共通種があるのでしょうか。それはどんな形や色をしているのでしょうか。日本のものとはどこが違うのでしょうか。これらの疑問について手っ取り早く解答を得るにはその国や地域で出版された図鑑を見比べるのが一番です。そういう関心から、ここ1、2年、変形菌の文献入手のかたわら幾つかの外国のキノコ図鑑を入手しました。それらの中で図版が美しいもの、魅力的なものを何点か選んでみなさんに紹介したいと思います。

もとより、キノコについては全くの素人ですので、紹介する図鑑にも偏りがあると思いますし、紹介する内容についても適切を欠いているところがあるかもしれません。また、ポケットマネーで購入するものですから高価なものはありません。あらかじめお断りしておきます。さて、前置きが長くなりましたが、早速、図鑑の紹介に移りたいと思います。

## 2. 図鑑の紹介

(1) Rose Marie Dähncke 著、「1200 PILZE IN FARBOFOTOS」、1993年  
出版社：AT Verlag (Aarau, スイス)、ISBN 3-85502-503-7、ドイツ語

「キノコ1200種カラー写真図鑑」とでも訳せばよいのでしょうか。1993年に出版された写真図鑑です。版型は15 x 22.5cm ですが、ページ数は1,179ページもあります。そのうち17ページから1158ページまでがカラー写真になっていて、原則として1ページ1種1カラー写真となっています。そしてそのカラー写真が素晴らしいのです。私たちはキノコ写真といえば伊沢流生態写真をまず思い浮かべます。自然の中に生えているそのままを、たとえ作為を施しても出来るだけそうとは気付かせないように丁寧に処理をし、深い絞りや遅いシャッターで周りの環境ごと切取った写真は、生態写真の1つのジャンルを確立したといえましょう。

一方では、ドイツのGustav Fischer社から出版が続けられているFarbatlas der Basidiomycetenの中の写真図版のように、種の特徴を表すための標本写真であることに徹し、幼菌や成菌、それらを切って傘と軸の断面を見せたもの、さらに、傘だけを切り取り、1つは表面が分かるように、1つは裏面が分かるようにしたものなどを1枚の台紙の上に置き、真上から写した写真があります。無味乾燥な写真ですが、外形的な特徴がよく分かり、同定のためには前述の生態写真よりはるかに役立つことは確かです。

Rose Marie Dähnckeさんの写真は、生態写真と標本写真との中間をゆく写真といってよいでしょう。(これは筆者の想像ですが、) 簡単な撮影台を採集現場に持ち込み、採集した成菌や幼菌など異なる成長段階にある複数の同一種のキノコを、これがポイントなのですが、周りの少量の土や苔や草や枯れ葉など、生育環境を表すものと一緒に、幾つかのキノコは生えている状態が分かるように撮影台の上に立たせ、幾つかは裏面が分かるように置き、断面が重要なキノコは切断したものを加え、さらに照明を工夫し、撮影したものです。生態写真と違い、無地のバックを背景にキノコが浮かび上がっています。使用されたフィルムの性質でしょうか、色は赤や緑の原色にやや華やかさが欠けていますが、落ち着いた色調に仕上がっています。とくにRussulaの仲間は、深みのある素晴らしい色調の仕上がりです。写真には簡単な種の記載がドイツ語で書かれています。キノコの名前は、ドイツ語の通称名と共にラテン語の学名も併記してあるので、ドイツ語の分からない筆者にも何のキノコか分かります。また、さらに詳しく種の記載を知りたい人のために、各ページに、名著と定評のあるKleine Kryptogamenflora 2b/2巻、M. Moser著、Die Röhrlinge und Blatterpilze(英語版があります。)や他の菌学書の該当ページが書かれています。

価格：148.00スイスフラン(77円換算、11,400円)

(2) M. Candusso・G. Lanzoni 共著、「LEPIOTA s. l. FUNGI EUROPAEI 4」、1990年  
出版社：Libereria editrice Giovanna Biella (Saronno、イタリア)、イタリア語

特定の分類群について、その分類群の研究史から始まり、分類体系や検索表、分類群に属する既発表のすべての種についての再検討・再整理とその結果に基づく記載、さらにその分類群についての全文献のリストなどを網羅したモノグラフと称される専門的な研究書があります。この本は、南ヨーロッパ産の種に重点がおいてありますが、広義のLepiota属(s.l.とは広義のという意味。著者のいうLepiota s. l.はMelanophyllum, Cystolepiota, Lepiota, Chamaemyces, Leucoagaricus, Leucocoprinus, Macrolepiotaの7属)に関する上述の項目を網羅したモノグラフです。本書では156種、31変種、4品種が扱われています。

一般的に、モノグラフがあれば、扱っている分類群の分類に関するすべてが分かるので、非常に便利なのですが、(キノコという限定が必要ですが)「優れた研究者、必ずしも優れた画家や写真家ならず」のため、モノグラフに付いている図版の多くは貧弱で、図版から実物をイメージすることがなかなか困難です。しかし、この本は違います。全体で741ページの大冊ですが、巻末の80ページは著者とは別の二人の菌類研究家が描いた素晴らしい原色図版になっています。また、本文の中には133図の顕微鏡図を中心とする、それぞれ1ページ大の線画があります。したがって、イタリア語が読めなくても、見るだけで十分楽しめるものになっています。また価格の安いのも魅力です。なお、本書の特色の一つに、そのキノコが新種として発表されたときの原記載がオリジナルのまま引用されていることがあげられます。

価格：119,600リラ(6銭換算7,200円)

今回は、ノルウェーで出版された極地と高山のキノコを扱った写真図鑑と、多くの方がご存じのスイスのルツェルン菌学会編の「FUNGI OF SWITZERLAND」を紹介し、同時に、これらの図鑑を安く個人輸入するためのノウハウを紹介したいと思います。

## きのこと花言葉

増田 良子

キノコの不思議展を見て、その色と姿の多様さ面白さとともに、キノコの持つ自然界の役目の大きさを改めて知った思いです。

太陽光線と無機物で自らデンプンなどを合成する生産者の植物、その植物、他を食べる消費者の動物、そしてそれらを再び無機質にもどす分解者、掃除屋の菌類。菌類がいるからこそ、この地球上は植物や動物の死骸、糞だらけになってしまうことはないということ。植物が茂り動物が住み、キノコが生えるという環境が人類にとって、いかに大切なものであるか、ぜひ子供達に伝えたいと思いました。

春山行夫著「花ことば」（東都書房）にキノコのことが載っていましたのでご紹介致します。キノコには有毒なものもあるので、イギリスでは「疑問」「私はあなたの全部を信用できない」という意味をもっていること。フランスでは「頑固」「強情」など、やはり毒に関係した意味と、キノコの急速な生長から「急速な幸運」を表しているということ。英語の日常語でキノコ（マッシュルーム）というと「成金」、「成り上がり者」を意味しているのも、キノコが急速に現れてくるからです。

キノコは童話や絵本の中にもたくさん登場します。不思議の国のアリスがキノコを食べて大きくなったり、小さくなったりするのはよく知られています。そんな情景を子供達として遊びたいと、いたずら書きをしてみました。

きのこの森の妖精と

白雪姫や小人たち

うたっておどって日が暮れる

夜道に光るツキヨタケ

てんでんこわいテングタケ

おなかすいてもおことわり



きのこの森の妖精と

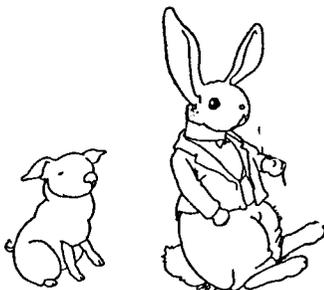
不思議なアリスうさぎたち

ねむってゆめみて目がさめる

まほうがとけたヒトヨタケ

わらいつかれたワライタケ

おなかすいてもおことわり



### 第3回談話会講座「硬質菌の分類」のご案内

談話会主催の講座も3回目です。今回は硬質菌を勉強しようということで、あの服部先生が講義をしてくださいます。ここで、ぱっちり硬質菌をマスターしましょう。

日時：3月11日(土) 10:00~15:00

場所：千葉県立中央博物館研修室

内容：「硬質菌の分類」 10:00~12:00 講義  
13:00~15:00 顕微鏡実習

講師：服部力(森林総合研究所)

担当：吹春俊光、小沼良子

参加費：500円

申込：今回は顕微鏡台数の関係で定員30名とさせていただきます(応募者多数の場合は抽選)。ただし、講義のみでしたらあと10名ほどご参加いただけます。参加ご希望の方は必ず往復葉書で講座名、住所、氏名、人数を明記して2月25日迄に事務局へお申し込みください。講義のみ出席という方はその旨明記してくださいと助かります。なお、電話でのお申し込みは一切受け付けません。メ切後、参加の可否のご連絡を葉書でいたします。

当日は、傷害保健には加入していませんので、各自ケガのないようご注意ください。  
※国立科学博物館主催による講座「ヒダナシタケ目の分類」(3/16)と内容は同じである旨、服部先生から連絡をいただいております。

### ありがとうコーナー

談話会宛に以下の書籍や雑誌が寄贈されております。寄贈して下さった方々どうもありがとうございます。事務局で保管しています。

#### 書籍・雑誌

「きのこ童話集」奥沢康正著 思文閣出版  
「夢自然きのこ2 きのこの目利き」  
山と溪谷社 ¥2500  
「東京きのこ」発行(株)ストーク、  
発売(株)星雲社 ¥1900

#### 会報誌

「いっぼん」第7号、第8.9合併号  
埼玉キノコ同好会  
「会報だいせつ」第11号 上川キノコの会  
「子供のためのキノコ観察ノート」  
多摩丘陵きのこ研究会  
「関西菌類談話会」14号、15号 関西菌類談話会  
「紅天狗」第3号 信州きのこの会  
長崎きのこ会 会報 No.9

#### その他

会員の小田嶋晴子さんからMacintoshのソフト「ページメーカーver.5」を寄贈頂きました。さっそく本郷先生の講義録作成に使わせて頂いております。多分、今回の会報がマックライトIIの最後になりそうです。

## 行事報告

### ☆採集会

第9回94年7月9日(土) 一宮海岸 参加:55名/採集種数:36点

海岸林特有のキノコを期待したにもかかわらず、カラカラ天気が続いた後でキノコはさ  
それでも110個の目玉で探すとそれなりにキノコが集まったのには驚き。しかし、採集会よ  
をしたほうがよい一日でした。

第10回94年9月17日(土) 泉自然公園 指導:本郷次雄/参加:73名/採集種数

本郷先生をお招きしての採集会。あいにくの大雨にもかかわらず、たくさんの参加者た  
たが午前中はまさしく豪雨。それにもめげずに皆、雨合羽で身をくるみカゴを片手に雨の  
探しに出かけました。皆さんがずぶ濡れになりながら採集してきてくださったおかげで、  
と信じられないほど集まり、皆さんの熱意のほどがうかがえた一日でした。

第11回94年10月15日(土) 市原市民の森 指導:服部力/参加:76名/採集種数

服部先生をお招きしての硬質菌の採集会。今年はキノコの当り年だったのでしょうか、  
キノコもたくさん採集でき、標本数にして137点も集まりました。

### ☆スライド大会

第3回94年12月3日(土) 中央博物館会議室 /参加者:69名

スライド上映希望者は多数あり、年々目を見はるほどの上達ぶりにびっくり。時間配  
ど盛況でした。次回は、できればもっとゆとりをもって観賞できるようプログラムを考え  
ます。来年度はテングタケ特集を行う予定です。バシバシ写真を撮ってみんなで自慢しあ  
今回の上映者は以下のとおりです。(敬省略)

池田和加男(51枚)豊富な写真の数々は流石。それにしてもサクラシメジの菌輪は物凄  
高橋重雄(65枚) キツネシリーズから始まって植物の写真まで、なぜか尾瀬の風景が印  
佐野悦三(42枚) エリオネマアウレ?よくわからなかったけど変形菌の世界はすばらし  
山田昌之(10枚) わざわざネガフィルムからスライドフィルムにして参加。こんなことも  
吉田幸二・悦子(38枚) ご夫婦力あわせての作品。その上達ぶりにはめまぐるしいものが  
田中弘美(80枚) おびただし数のカニノツメに圧倒された。なんだか夢にできそう。  
伊藤隆弘(21枚) 高崎の関東ふれあいの道を彩るカラフルなイッボンシメジ属を特集。  
横山元(10枚) 非のうち所のないお手本のようなキヌガサタケの写真は見事であった。  
石谷栄二(12枚) 千葉県でこんなものが生えるなんて、ニオウシメジは巨大だった。  
腰野文男(9枚) 今年大当りのバカマツタケ。スライドだけでなく、食べたかった。  
小田嶋晴子(10枚) 植物写真を撮っていた小田嶋さん。今年からキノコにも挑戦。  
翠田 丕(10枚) 初心者代表の翠田さん。写真勉強会の成果を披露。  
大作晃一(8枚) 今回はキノコは人にまかせ、記念撮影特集だけ。  
イグチ特集(大作、腰野、佐野、石谷、吹春) 35種類のイグチが登場。千葉県にも  
くさんのイグチがあったのか。



それこそ、プロ・アマ問わず日本中にたくさんのお弟子さんがいらっしやる浜田先生は、若輩者の私などでは語り尽くせない、たいへん偉い先生なのです。

浜田稔先生は1910年12月18日、考古学者で元京都帝国大学総長の浜田耕作氏の長子として京都にお生まれになりました。京都一中、三高をへて1928年京都帝国大学理学部植物学科で植物学を専攻、1934年からは同大学院で群場寛教授(\*1)のもと植物生理生態学を修められ、その後理学博士を取得されました。戦争中は陸軍技師として大陸に赴き、1947年から京都大学農学部助教授に就任し、植物生理学や菌根学を講じられています。先生のご研究の一つに菌類と高等植物との共生関係があります。ナラタケとツチアケビとの共生関係、ナラタケの生理・生態等ご研究になり、この仕事は世界的に評価されています。戦後、樹木菌根、特にマツタケの研究にも専念され、はじめてマツタケ菌糸の純粋培養に成功。1947年からは京都の岩倉、尼吹山においてマツタケの生態と気象観測を開始し、実に床に伏す1980年まで続けられ「マツタケ日記」としてまとめられています。また、培養が難しいとされる菌根菌のための培地をつくり、現在も「浜田培地」として知られています。さらに、先生の功績の一つに日本菌類学会関西談話会(現関西菌類談話会)を創立され、菌類学の普及と発展に寄与されたことがあげられます。良き師、良き指導者として人の育成にたいへん力を尽くされ、現在、多くのお弟子さんが研究者としてご活躍されており、また、専門の研究者だけでなくアマチュア研究家の育成にも力を注がれました。先生ご自身は研究のみならずスポーツにも長け、中学では野球、大学ではテニスを、また水があると泳ぎだすというほど水泳がお好きな方でした。しかし、幾多の業績と多くの弟子を残された大先生も、1981年9月29日、通い続けた岩倉、尼吹山の麓の病院で生涯をとじられました。享年70才でした。

参考：浜田稔元会長追悼号。日菌報 22:269-270, 1981、日菌報 23:531-561, 1982

小川真、「マツタケの話」築地書館

\*1群場寛教授 京都大学理学部長を退官後、戦時中昭南博物館へ司政長官として赴任。昭南博物館は前号の表紙のコーナーさんが占領下、研究していたところ。コーナーさんは浜田先生のことを視野の広い人と言っていた。

**\*浜田先生を知るための読書ガイド\*** 浜田先生が直接お書きになられたものは少ないのですが、お弟子さん達が沢山の本を書いておられます。まず築地書館から現在刊行中のきのこ生物学シリーズ全8冊。著者の全員が浜田門下生です。なかでも相良直彦著「きのこ動物」は一気に読めます。また浜田先生は沢山のマツタケ研究者を育てられました。その一番弟子の小川眞著「マツタケの生物学」(1978、築地書館)は平安時代から説きおこしたマツタケ百科に興味つきません。くだけたところで「マツタケの話」(小川眞著、1984、築地書館)。絶版ですが図書館などで見つけたら読んで頂きたいのが「菌を通して森を見る」(小川眞著、1980、創文)。キノコの目で森を見るという視点はこれまでにありませんでした。他にも沢山の本があります。さがしてみてください。

#### \* 編集後記 \*

\*12月17日、女の子が生まれた。名前をつけるのに大慌て。きのこちゃんなんていうのは当然家族の猛反対をうけた。画数を見たりするとやたら面倒くさい。水と木からきのこはできる。だからみずきちゃんだ。またもや家族から白い目で見られた。満月の夜に生まれてお月さんがきれいだったから「エーイ!美月ちゃんはどうだ」家族は意外と単純だった。星目がちな美月ちゃんのひとみを見つめ、絶対に娘は嫁にやらないと僕はかたく心に誓うのであった。(見)\*博物館できのこを担当している職員と私をお思いの方が多いのだが、それは大きな間違い。展示室での解説が仕事で、きのこは全くの私事です。(良)\*今回の付録に紹介した「きのこ山通信」は長野県ご在住の野池元基さんがつくっておられる個人ミニコミです。面白いので転載させて頂きました。野池さんは「サンゴの海に生きる」(農文協)などを書いておられるジャーナリストです。(春)

千葉菌類談話会通信 No.9 1995年2月15日印刷、発行

会長：腰野文男

事務局：千葉県立中央博物館 植物学研究科気付「千葉菌類談話会」

千葉市中央区青葉町955-2

電話：043-265-3921 Fax：043-266-2481

郵便振替口座：00100-5-550400「千葉菌類談話会」